

近隣分野とのコラボレーション 新創業デザインへ シリーズ1

時代の変革の中、コラボレーションは新しい職能の転換のきっかけとなっている。

■パネラー：

プロダクトデザイナー 浅井治彦
建築家 古市徹雄
司会: JIAデザイン部会長 大倉富美雄

JIAデザイン部会では、「近隣分野とのコラボレーション」を問題提起したいとの意図から、各分野の論者を招いて討論会を3回シリーズで企画。第1回の会場には特別ゲストとしてNHK美術館元プロデューサー・西松典宏氏も参加し、一例を挙げて「オルセー美術館は本当は『アカデミズム』という一派に殴り込みをかけてひっくり返した転換の時代の象徴であり、何かをひっくり返すバネで時代は動く。」と話した。果して“JIAの新たなバネ”を想起させるかの熱き議論。三者の討論の骨子を追う。

大倉 環境という問題は単純ではなく、注意しなければいけないのは、コラボレーションというものはある意味では拡散していて、今まで専業と考えていた建築家やプロダクトデザイナーの中にお互いにつながっているものが出てきたり、環境エンジニアや法学や経済分野からビジネスとしてエコの問題を通じて入ってきています。つまり環境の問題がある意味で「草刈場」ようになって来ています。ただ、まだ新しいルールなり設計思想が決まっていない中で、もっと見えるようにしていきたいということがあります。単なる他の業界の人と協力することがコラボレーションではないということを討論の中で探ってみたいと思います。まず環境問題をどう捉え、コラボレーションをどのように考えていますか。

浅井 学生の頃は、環境問題と言うのがありませんでした。現在、フリーランスのアトリエ系のデザイナーは非常に大変な時代となっていて、

デザインの世界でも昔はスタイリングの良いものを作っていたらよかったのですが、例えば最近の携帯では操作部分のインタラクティブなデザインが重要になってきています。プロダクトデザインにおける現在の問題点は環境問題に対してどう応えるか、二つ目に新しい領域のデザインがどう捉えていくか、特にエコデザインについていかに環境効率を上げるかということにつきるわけですが、どんなに環境効率がよい商品を作っても、関係性のデザインやソーシャルデザインの部分が生まれてこないという環境問題は大きくは解決できないということです。もう一つは、多様性です。その土地、その場所、その気候に適合した暮らし方や関係性まで含めて考えていくには、単にプロダクトデザイナーという領域だけでなく、様々な分野の方と協力しないとできないと思います。

古市 建築の世界で環境問題という日本はものを作り続けなければならないということもありどうしてもエンジニアリング中心の、機械の効率化へと向かう傾向があります。しかし世界の流れを見ていくと冷房がなくてもよいではないか、我々の祖先はそれでやってきたわけだからという考えが主流になりつつあります。そのかわり冷房がなくても気持ちよく過ごせる方法を現代技術からまさせながら考えるべきではないか。そうすると建築家だけではできないわけです。これからの21世紀の建築は今までのように科学と技術で自然を制御して人間の利便性を追求したものではなく、地球がここまで破壊されてしまうと、建築として何ができるかという貢献が強く求められます。そこから新しいデザインが



浅井治彦
プロダクトデザイナー
明星大学造形芸術学部教授
(社)日本インダストリアルデザイナー協会 (JIDA) 環境委員会委員長



古市徹雄
建築家
千葉工業大学工学部建築学科教授
JIAマガジン編集長

生まれるはずですが。それは我々の先祖が何千年かけて作り上げてきた厳しい自然の中で生きる気候風土に適した叡智を、現代のハイテックとハイブリッドに使うということです。それらの叡智はその地域特有のものでなく、地域性を越えて相互利用が可能な普遍性を持つものであると言えます。それには建築だけでなく、他分野とのコラボレーションが大きく求められているのではないかと考えています。

大倉 環境というのは難しい言葉で造形の問題や教育の問題、建築家の問題などいろいろな切り口がある中で、デザイナーや建築家が持っている思いが社会の主流として認知され、力を発揮していくにはどうしたらよいと思いますか。

浅井 1997年に無印良品の仕事でヨーロッパに行くことになり、訪問国とは別にストックホルムで一人のデザイナーに会ってくれという案件が飛び込んできました。ヤン・ドランガーさんはその時60歳ぐらいだと思いましたが、会うなり30年以上前の一枚の新聞記事“30年後に石油が無くなる”を見せてくれ、「一生このことを忘れないようにと誓い、これをコンセプトの核にしてやっているんですよ。」と話してくれました。もう一つ驚いたのは、1970年代にノックダウン方式でIKEAが出した家具があり、それを仕掛けたのが彼の会社です。簡単に組み立てができて、世界中で大ヒットした製品シリーズがまさに今と言うエコの4Rを追求したデザインだったのです。

ビジネスのポイントについて。日本はデザインをスケッチで見せて

しまうのですが、ヤン・ドランガーさんは試作品をすぐ作ってIKEAの社長に電話したんです。「僕は画期的な家具を考えました。」と。完成度が高い商品でしたから、社長はすぐにロイヤリティの話をしたんですが、彼は断ったんです。「僕はデザイナーですから、この製品シリーズはすべて責任を持ってデザインします。あなたはメーカーですから売ることを考えてください。そしてこのシリーズの家具のために、イノベーターという会社と一緒に創りませんか。」と言ったんです。当然のようにヨーロッパで爆発的に、そして世界でヒットする家具になりました。もちろん訪問当日の彼がプレゼンした商品に対しては、エアソファという商品に結びつき良品計画との契約に成功します。

今後は持続可能な社会構築の中で、ソーシャルデザインとかいろいろな才能の人と組まないと無理です。そういうところからビジネスやさまざまな可能性が広がってくると思います。

古市 現在、日本はみんなで足の引っ張り合いをしている状態でこのままでは進歩がありませんので、個人がやる気を出して行動しないと始まりません。日本にもまだまだ可能性があると思います。自然を守るという伝統、多様性、伝統的な建築の工夫、それらは十分現代に復活できるものです。もちろん、そのような叡智は世界各地に存在します。すると建築家は従来のデザインの枠からはみ出して、世界中の様々な分野のエキスパートと協同することが必要になってきます。今までのデザイン上だけのコラボレーションとは異なったお互いの分野に介入しながら互いに切磋琢磨し、新しい価値観を求めていく必要があると思います。建築でいえば新しいものが生まれてくるのはそこからしかあり得ないのではないかと期待を持っています。

大倉 私も日本に帰ってきて20～30年経って考えて見ると、私も変えていこうとしたんですが、今ある日本の既定権力というのはものすごい。デザイナーと建築家は純粋に社会の複雑な構造を知らないということはあると思います。解ってきたのはコラボレーションは新しい職能の転換のきっかけになってきているんだろうし、やれるところが出てきて

いる。それを大きな組織に属して遣われてやるのではなく、自分の個人の力でやらなければ何も始まらないというような自覚として必要で、そういう中でこそ新しいコラボレーションの形が見えてくるということが今日の結論だと言えます。

コラボレーションこそが、夢を創造するカギ

JIA元デザイン部会長 連 健夫

大倉デザイン部会長は、①建築家でありプロダクトデザイナー、②海外の経験が豊富、③元日本インダストリアルデザイナー協会理事長、元大学教授と、今回のテーマを扱うのに相応しいユニークな経歴の持ち主である。3月、デザイン部会での講演で、氏は「垣根のないデザイン」をテーマに、「混沌とした時代の中で、それが新たな仕事と新たな職能が生まれる」とした。今回はそれを受け、建築家の古市氏とプロダクトデザイナーの浅井氏を招いてのディスカッションとなったのであるが、さすが時代をリードするパネラー、中身が濃く期待以上のものとなった。

はっきりしたことは3つある。1つは、「パラダイムシフトの中でコラボレーションは必要である」、2つめは、「時代をしっかりと読み取ることで、コラボレーションが生きてくる」こと、3つめは、「コラボレーションが成功するためには個人が強くなければならないこと」である。ここで大切なのは時代の読み取りであろう。浅井氏は地球環境への配慮を指摘し、古市氏は普遍的な地域性(ユニバーサルヴァナキュラー)を取り上げた。コラボレーションは時代を読み解く先見性において、分野を超えた幅の広い知識と開いた思考が求められる。自分のテリトリーに固執する閉じた姿勢では、決してうまくいかないのである。討論会では話が及ばなかったが、インターネット社会が進めば進むほど、離れた場所でも個人と個人が繋がることができ、コラボレーションが容易となるわけで、そこに様々な可能性がある。今回の建築基準法、建築士法の改正は、アトリエ派の切り捨て施策との論もあるが、多様なニーズの中で、コラボレーションこそが、生き残り夢を創造するカギにならなくてはならない。今後の討論会に期待したい。

設計の核心へ— 今後の展開は

JIAデザイン部会長 大倉富美雄

デザイン部会は不思議な部会である。もとより設計の主要な核は真の意味のデザインであるから、JIAの中枢にあっても良からうと思えるのだが、当たり前だから部会にする必要もないとか、建築家はデザイナーとは言って来なかったというトラウマからか、認知が軽く、実際、各支部のうちデザイン部会があるのは関東甲信越支部だけだそう。そういう中で、元部会長の連さんが拙著「デザイン力/デザイン心」(美術出版社)を読み、半年に渡って口説かれ、ともかく1年引き受けたのが今度のシリーズ企画。討論会の意図は、建築家の本道を見極めようとするものである。

要点的にまとめたという願いから3回だけのシリーズを計画。1回目はコラボレーションを軸に問題提起という形で行い、結果的に浅井、古市両パネラーの話も合い、熱気のうちに終わった。2回日の9月25日(金) 予定はこれを受けて「コラボの真髓から収益活動へ」(仮題)を考えている。イントロとして、環境・エコでどう収益に繋げるのかと問い、そのためにどんなことが問題で必要なのかと論じていく。ここで設計業界の追い詰められた現状をすり抜ける道筋の模索があらわになってくるはずと考えている。

そして12月4日(金) 予定の3回目は「個人を強め社会提起へ」(仮題)として、核心に触れて行きたい。2回目では明示されると思われるアトリエ系事務所の窮状からの救済方法を念頭においたもので、設計の本懐に還り、真の建築家に夢を再現させるための手立てを示そうとするものだ。そのために必要な法的手段を模索しメディアに提起していきたい。各回、出来るだけ適切なパネラーをお呼びし、議論を深めて頂く予定なのでご期待ください。協力して下さる、コア・メンバーを求めています。



産学協同ヤサカ/明星大学
ファニチャーコンペ上位入賞者(後列中央)とプロジェクトスタッフ
最優秀賞 奥山敏一
優秀賞 松本真夏
内野真由美

最優秀賞: 作品名「パズルチェア」。地産地消活動の取り組みとして、地元・多摩地区の檜の調伏財を使用。暮らしの中で楽しく使える「創作椅子」。ホームセンターのヤサカで発売される。(定価34,000円税込)



連 健夫
建築家
連健夫建築研究室
JIA元デザイン部会長



大倉富美雄
建築家
大倉富美雄デザイン事務所
JIA元デザイン部会長